

クリストファー・ウォールのステンドグラス

—— 近代ガラス工芸史における新素材の意義に基づく考察

慶應義塾大学 方波見 瑠璃子

19世紀末、イギリスの教会や大聖堂に数多くのステンドグラスを制作したクリストファー・ウォール (Christopher Whitworth Whall, 1849-1924) はアーツ・アンド・クラフツ運動を代表するステンドグラス作家として知られる。ウォール研究者として重要なP. コーマックによれば、近代ガラス工芸史におけるその重要性はアーツ・アンド・クラフツ運動の流れにおいて作家かつ教育者としてステンドグラス作家を育成した点にあるとされてきた。それに対し発表者は一次資料の精査に基づき、むしろ彼のガラス素材の革新的な探求に注目することで、大戦後に抽象性を増していくコンテンポラリー・ステンドグラスの嚆矢として彼の意義を再評価する。

16世紀の宗教改革以降、衰退の一途を辿ったステンドグラス産業が再び活気を帯びた19世紀のゴシック・リヴァイヴァルにおいて、色ガラスを鉛線で接続する中世以来の伝統的なステンドグラスの制作方法を正しく認識している職人は最早僅かであり、透明なガラスに絵付けを施した、いわゆる「ガラス絵 (painted glass)」の生産が大半を占めていた。この事態を憂慮したウォールは絵付けを批判し、中世以来のステンドグラス本来の制作を実践的に探求した。彼の新たな試みは、とりわけ以下の二点に評価される。すなわち第一にはウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) の工房をはじめ当時一般的であった分業制を疑問視し、個々の職人が全工程に精通することを理想に掲げて伝統的な制作方法を再評価した点である。ウォールの工房の製造プロセスがモリスのそれと大きく異なる事実は看過すべきではない。第二に、ウォールが絵付けに頼らず、当時の最新の素材、プライアーズ・アーリー・イングリッシュ・ガラス (Prior's Early English Glass) を野心的に採用した点だ。これはガラスにとって最大の特性である光による造形を実現した。ガラス素材には薄さと均質さが追求されてきたが、19世紀半ば以降、不均質で厚みのある中世のガラス素材を再評価して科学的に分析する研究が盛んになった。その成果がプライアーズ・アーリー・イングリッシュ・ガラスにはほかならない。ウォールはこの素材をいち早くステンドグラスに取り入れ、当時流行していたガラス絵にはない、ガラス素材そのものがもつ輝きをとらえることに成功したのだ。

20世紀以降とりわけ盛んになったコンテンポラリー・ステンドグラスでは絵画的な表現から一層距離が置かれガラスの特質が全面に現れるようになる。発表者は、ウォールのガラス絵への批判はこの傾向の端緒として位置づけ得るとの立場に立つ。ウォールはステンドグラスの制作方法を見直し、ガラス素材ならではの可能性を丹念な実験によって追求することで、ガラスにしかできない表現を叶えたのである。